

平成 22 年 5 月 19 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820005

研究課題名（和文）18世紀後期日本における近代的国家論の思想史的研究

研究課題名（英文）Intellectual Historical Research on Discourse on the Modern State in Late 18th Century Japan

研究代表者

大川 真（OKAWA MAKOTO）

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：90510553

研究成果の概要（和文）：本研究は18世紀後期日本における近代的国家論の誕生を重視し、当該期の徳川政権の中核を担った松平定信の国家論や政治観を摘出した。著述活動が盛んであった白川藩主時代の著作に注目し、「君民一体」論を中核として国家統合を図っていたこと。また祖先への報恩の強調、官刻孝義録の出版などにより、定信政権は「孝」イデオロギーの強化によって内憂外患を乗り切ろうとしていたなど、新たな知見を提示した。

研究成果の概要（英文）：This research stresses the importance of the birth of discourse on the modern state in late 18th century Japan and seeks to bring out the political views and discourse on the state propounded by Matsudaira Sadanobu, who was at the hub of the Tokugawa regime of that period. With special attention given to his works of the period during which he was the feudal lord of the Shirakawa domain and writing very actively, I describe his designs for a unified and integrated state based on “*kunmin itta*” (oneness of the ruler and his people). Also, through emphasizing the weight and value of a debt of gratitude to one’s ancestors and the publication of his ‘*Kankoku Kogiroku*’ and other works, Sadanobu’s administration sought to bear through internal troubles and external threats via a strengthening of the ideology of *kō* (filial piety), and thus presented a new intellectual perspective.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,050,000	315,000	1,365,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,250,000	675,000	2,925,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：(1)思想史 (2)国家論(3)近代 (4)松平定信(5)天皇(6)幕府(7)寛政朱子学派(8)水戸学

1. 研究開始当初の背景

(1) 西洋列国からの圧力によって近代日本国家が成立するという通説がいまだ根強く浸透している。しかし日本の近代化は、そうした外発的な要因だけではなく、内発的な要因も考えなければならない。このような問題意識を持った際に最も重要な内発的要因として挙げられるのが18世紀後半に成立した大政委任論である。大政委任論の成立以前は、天皇と将軍との関係規定が極めて曖昧であったが、大政委任論の成立によって、将軍をはじめ全ての武家が天皇の臣下（「王臣」）として位置づけられ、政治運営は天皇からの委任・職任として正当化された（藤田覚『近世政治史と天皇』、吉川弘文館、1999年）。大政委任論の表明される寛政期の政治状況はいわゆる内憂外患の時期にあたり、徳川王権と京都王権の並立といった曖昧な関係では支配が貫徹できず、統一的国家イデオロギーが必要とされたという見解がある（山本博文「徳川王権の成立と東アジア世界」、水林彪ほか編『王権のコスモロジー』所収、弘文堂、1998年）。近代日本国家は、いわゆる尊皇の志士たちの武力闘争によって作り上げられたとする見方がいまだに根強いが、国家論研究の立場からすると、18世紀後半に、天皇を身分的頂点とした統一的国家イデオロギーによって徳川政権が国内再編を図ったことの意義は極めて大きい。ただし従来の研究ではほとんどこの点が看過されてきた。政治史や国制史では当該期における朝幕関係の実態解明を進めてきたが、イデオロギー解明そのものは未だ不十分である。

(2) 一方、思想史研究では、朱子学の正学化などの寛政期における教学状況が解明されてきたが、統一的国家イデオロギーが醸成される政治史的状況とリンクさせた研究はほとんどない。このような研究史の状況にあって、辻本雅史氏の研究は、寛政期の政治・思想・教育を一体化して捉え、国家統合論の内実を解明した点で極めて意義がある（『近世教育思想史の研究—日本における「公教育」の源流—』、思文閣出版、1990年）。しかしその後の研究史において、辻本氏が示した方向性を進展させる研究は無い。私は旧稿において寛政期朱子学派の統合論が、「正名」（「名」を正す）を思想原理として成立し、新井白石の将軍＝「国王」号を批判の俎上に載せ、徳川「将軍」の呼称を、天皇から「大政」を委任され、臣従の礼を示す「大君」と定義して、天皇と将軍という二人の治者の関係を整合的に説明

し統一的国家イデオロギーとしての性質を色濃く持っていたことを明らかにした。従来の研究では、当該期に名分論や尊王（皇）論が昂揚することを漠然と指摘するに留まっていたが、私の研究によって、このような思想状況の背景には内憂外患の克服のために統一的国家イデオロギーを必要としていたこと、またこれらの論理の生成メカニズムまで明らかとなった。

(3) 以上(1)(2)の背景に基づき、本研究は、近代的国家の胎動を国家論の視座に基づき18世紀後半から措定する点で、また当該期に見られる名分論や尊王（皇）論を統一的国家イデオロギーとして捉え直し、その思想のメカニズムをも内在的に解明することを目的として開始した。

2. 研究の目的

松平定信に関しては、大政委任論が表明された『将軍家御心得之箇条』（1788年）が政治史の研究で資料としてよく取り上げられるが、その他の著作に関する解明はほとんど進んでいない。定信の思想に関しては、荻生徂徠の思想との近似性の指摘（田原嗣郎）や神国思想観の解明（清水教好）などがなされてきたが、定信の思想全体像からすれば部分的な解明に過ぎず、思想の全体像が喫緊の課題となっている。138冊に及ぶ著作のなかで、現在のところ活字化されている資料は限られており、従来の研究は活字化されている少量の資料に拠っていることが、問題点として挙げられる。本研究では、定信が遺した主要な著作が収められている『楽翁公遺書』だけではなく、まず各研究機関・図書館に所蔵されている定信の著作群に関する書誌学的な調査を行うことを第一段階の目的とする。続いてこのような書誌学的な基礎作業に基づきつつ、テキストの思想内容の解明に着手することを第二段階の目的とする。定信の思想解明にあたっては、白川藩主時代、老中時代、老中致仕後で変化が見られるとの指摘があるが、まずは成立年代が確定できる著作に関しては、時期区分にも着目し、とりわけ多くの著作が執筆された白川藩主時代の著作群を分析の対象としたい。

このような基礎作業を積み重ねていき、従来の研究で断片的に論じられてきた松平定信の思想全体像を解明し、それによって、近代的国家観がどのように誕生していったのか論ずることを最終的な目標とする。

3. 研究の方法

(1) 平成20年度

松平定信の思想を解明するための基礎作業として、定信が遺した膨大な著作群に対する調査を中心作業とする。定信研究においては多くの著作が収められている『楽翁公遺書』が主要なテキストとなるが、『楽翁公遺書』は1893年に江間政発によって編集・刊行されたものであり、『楽翁公遺書』に所収されている文章と他の写本・刊本との校勘という基礎作業が必要となる。また『楽翁公遺書』に所収されていない重要な著作も数多くあり、その場合、マイクロフィルムやCDで焼き付けの資料を取り寄せ、また現地に赴いて資料調査を行う。具体的には政治論の主要テキストである『国本論』、『政語』、『大学経文講義』などを対象に、国立国会図書館や国立公文書館などで数度にわたって綿密な調査を行う。

初年度である平成20年度ではこのような資料調査を中心に行うが、資料整理は近世思想史を専門とした大学院生にアルバイトを要請する。

また知見を拡げるために、学会や研究会に参加する。学会では、日本思想史学会、さらに隣接分野である日本史研究会、中国社会科学学会、日本倫理学会などに参加し、最新の研究成果を取り入れ、他の研究者との交流を深めていきたい。また学会以外の研究会にも積極的に参加し、新たな知見を得たいと考えている。さらに定信研究の第一人者である藤田覚氏（元東京大学教授）の講演にも聴講して研鑽を深めたい。

平成20年度は松平定信の主著『政語』に対する書誌学的な調査を中心軸としつつ、学会・研究会への参加、国内外を問わずに有力な研究に対するリファレンス等を補助軸とすることによって、研究萌芽の成長を促進することにつとめた。

(2) 平成21年度

終年度である平成21年においては、前年度の研究成果を活用して、学会発表や論文などによって研究成果を表していく。

まず台湾大学主催国際シンポジウム「東アジアの儒学と日本」（台湾、台北、2009年9月25-26日）において定信の経書註釈について発表する。その際に中国語原稿については、留学生に翻訳のバイトを要請する。この国際シンポジウムでの参加・発表を通じて、東アジアの思想世界をマクロに見渡した上で松平定信の思想を位置づけることが可能になると予測される。

具体的には『大学経文講義』を検討してその特徴や、朱子学との差異、また東アジア思想における位置づけなどを論ずる。つづいて東北史学会2009年度大会において定信

の政治思想について発表する。具体的にはその国家統合論や孝イデオロギーなどに焦点を絞り解明する。この学会では政治史・国家史などの研究の視座から定信の政治思想をより客観的に位置づけることが可能になると予測される。

国内外での学会発表を通じて多くの研究者から意見・批判をいただき、その成果を論文にまとめる際に活かす予定である。

4. 研究成果

松平定信については、藤田覚氏らによって政治史的観点から研究が進められ、近年では高澤憲治氏の著作も刊行され、政権の成立・崩壊についての詳細が明らかになった。しかしながら彼の政治理念・思想の詳細は明らかとなっていない。本研究は従来等閑にされてきた定信の思想解明に真っ向から向かいあったほとんど唯一の研究業績と言いうる。

本研究では著述活動が盛んであった白川藩主時代の著作、とりわけ天明4(1784)年に著された『大学経文講義』（別名『大学経文解』、『大学講義』）に注目して、以下の点を明らかにした。(1)「君民一体」論を強調して国家統合を図っていたこと。(2)また「君民一体」のために、君主が「人欲」にくらまされず「本然の性」を発揮し儉約に勤め、民の手本となり自然と徳化がなされると考えていたこと。(3)また君主は安民を旨とする一方で、祖宗への恩に感謝し国家運営に当たる必要を説いていたこと。(4)同時期に官刻孝義録の出版などがあり、定信政権は「孝」イデオロギーの強化によって内憂外患を乗り切ろうとしていたこと。(5)かかる君主論には、南宋の真徳秀『大学衍義』の影響が大きかったと考えられること。以上の新たな知見を提示し得た。

以上の成果を「松平定信之《大學》釋義」（台湾大学主催国際シンポジウム「東アジアの儒学と日本」、台湾、台北、2009年9月26日）と「松平定信の政治思想」（東北史学会2009年度大会、日本近世近代部会、仙台、2009年10月3日）などの国内外での学会において発表した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①大川真、荻生茂博著『近代・アジア・陽明学』、日本思想史研究、査読無、40号、2008、pp.99-108

②大川真「知」の伝達をめぐる全体討論総括-反時代的精神を懐中しながら-、年報日本思想史、査読無、7号、2008、pp.57-60

③大川真、佐久間正著『徳川日本の思想形成と儒教』、文芸研究、査読有、165集、2008、pp.76-77

④大川真、和久井洋子、翻訳 スーザン・L・バーンズ『国家以前—近世日本における国学と共同体の表象—』、日本思想史研究、査読無、41号、2009、pp.118-137

⑤大川真「回顧と展望」(2008年度近世、思想編)、史学雑誌、査読有、118-5、2009、pp.827~830

〔学会発表〕(計3件)

①大川真、「政事の構造」論再考、東北大学・奈良女子大学合同研究会シンポジウム「日本の政治の形(かたち)—王権と政治権力をめぐって」、2009年03月17日、奈良市

②大川真、「松平定信之《大學》釋義、台湾大学主催国際シンポジウム「東アジアの儒学と日本」、2009年9月26日、台湾、台北

③大川真、「松平定信の政治思想、東北史学会2009年度大会、2009年10月3日、仙台

〔図書〕(計2件)

①大川真、石毛忠ほか編、山川出版社、日本思想史事典、2009年、年表(近世部) pp1084-1093

②大川真、遠山淳ほか編、有斐閣アカデミア、日本文化論キーワード、2009年、pp.74-75, pp.147-148, pp.150-151

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/shisoshi/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大川 真 (OKAWA MAKOTO)

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：90510553

(2) 研究分担者

(0)

研究者番号：

(3) 連携研究者

(0)

研究者番号：